

# 西洋絵画私見

於：在京会津高同窓会  
平成31年4月21日  
北海道教育大学名誉教授  
相田 幸男（高19回）

教育研究職と云う社会での仕事を卒業し、専門領域である絵を描く事を中心に日々を過ごしております。古希を過ぎ、絵画の真髄、魅力の片鱗に漸く触れた思いであります。回り道をしたものの、希望した大学、大学院へとすすみ、その後も美術という分野を生かした仕事に就く事が出来た事は幸いでした。大学では、油画を専攻し、油彩画を中心に研鑽しましたが、予てから興味のある学芸員の資格取得にも取り組みました。美術の視野を広範囲にしてくれた事は云うまでもありません。

洞窟壁画を起源とする西洋絵画の流れは長大で、西方では、人間を中心とした世界観が重要な位置を占め、キリスト教の考え方が大いに影響を及ぼしております。教会を覆った壁画群を抜きに美術、文化を考えることは出来ません。一方、東方に於いては、自然万物の空気感を捉えた表現が核になっていると考えます。

私見としては、西洋絵画の流れに二つのエポックを置きたいと思えます。第一が絵画の技法、表現が確立されたルネッサンス期、遠近法などの発明による具体的な造形表現はダ・ヴィンチ、ミケランジェロに代表される作家の作品群を生み出し、キリスト教の伝覇にも大いに寄与します。第二は十九世紀、産業革命での写真術の発達により、絵画の記録性という目的意識からの解放がなされ、自由な絵画表現の開花に至ったことが挙げられると思えます。チューブ入り絵の具の登場によりそれまでの屋内での制作が屋外へと拡大し、印象派と呼ばれる作家連が誕生します。日本に於いてはこの時点で西洋絵画が移入され、工部省等、国家の主導で発展します。明治期の後半には、文部省等による美術教育の方針が、留学帰朝組を中心として、西欧の考え方が要になっていきます。更に美術造形思考の根幹が形成されるに至ります。伝統基盤の薄かった西洋絵画の領域ですが、世界の地域差が無くなってきた今日、技術表現力は確立されており、一方で東方と西方の双方の魅力を持った絵画観が認識されようとしています。

また、他方AIによる新たな表現が確立されようとしています。これを第三とするか否かは後年に委ねるとして、私の守備範囲ではありません。

戦後の美術教育で育った私ですが、初めて感動をした絵が、中学生の修学旅

行の折り、上野の国立西洋美術館で観た C・モネの「睡蓮」の大画面でした。水面のみの描画であり乍ら、はち切れんばかりの色彩の洪水は、観る者を圧倒します。現在、1930年創設の独立美術協会という公募団体で審査員を務め、出品をしております。毎秋、2メートルを超える大画面の出品作と格闘をしています。モチーフは変化してきましたが、一貫して具象表現の作品を発表してきました。

私にとって、具象絵画の制作にはひとつの考え方があります。学生時代に出会った、アリストテレスの「形而上学」の冒頭にでてくる「視覚の優位性」と云うことばで、転じて、見えるものへの愛好から捉える行為、即ち、絵画制作に依って対象を表現するという考え方です。大きい、小さいに始まり大凡の外形を把握する。この人間にのみ許された絵を描く表現行為は、如いては人間社会の先進を導き出すことも可能であると考えたいのです。この考えは、非生産的と思われがちな絵画制作を遂行していく上でのこころの支えになりました。また、近年においては、手を動かすことでの創造行為が生涯教育として極めて有意義であり、有効であると提唱されていることにも着目をしています。

具象絵画を成立させるにはスケッチ、デッサンは重要であり、先達は折りに触れ、その重要性を説いています。自身の作品では対象のものを描画、構成し、イメージを観る人に問いかける表現を試みています。自分自身の眼で捉えることが主となるので、今までの生き様、環境が基になります。文化庁芸術家在外派遣での1年間の滞仏経験は、己の日本人であるという意識の醒覚に目覚めた出来事でもあり、海外に身を置いたときに感じる日本人としてのアイデンティティー、感性、外物を眺める視点は大切にしたいと思います。

ルネッサンスの巨匠、L・ダ・ヴィンチは「sapere vedere」見ることは知ることだとも述べています。

先達の言葉を座右に、具象に拘った、絵画であるが故の心象表現の深化を念じております。

今般、このような機会を与えて下さった同窓会、並びに19回同期の皆様へ御礼申し上げます。

【パブリック・コレクション】北海道立近代美術館、東京・青梅市立美術館、会津高等学校、鶴城小学校他。有難うございました。